
魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

眈篋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 孤高の黒き剣士

【Nコード】

N9474Z

【作者名】

毗篋夢

【あらすじ】

主人公は何の変わりもない只の高校生。そんな主人公はある日買い物に出かけ、その帰り道にひょんなことで死んでしまう。目が覚めたら……。これはよくあるとある転生の物語り、神様から貰った力で原作ブレイクをしていく。

No.01 終わりと始まり(前書き)

作者の初めての投稿で何かと至らぬところが多々あると思いますが、よろしく願います!!

楽しくやっていけたら良いと思います。

No.01 終わりと始まり

えっと・・・とりあえず目の前で
何が起こっているのかを整理しよう。

「で、あんた誰？」

・
・

そこは真っ白な空間で土下座をしている少女がいた。

おいそこっ！警察に電話すんな！！

「で、ここ何処？そんなもって、アンタ誰？」

「ごめんなさい、実は姉神様の机でモン3rdでイビ○ジ○
を狩っていたら

気づいたら眠っていて、その・・・」

「・・・で？（もしかして・・・）」

「あたしのヨ○レで汚してしまって、破けちゃいました。テヘッ」

「・・・やっちゃっていいよね？（怒）」

「ごめんなさー！ーいっ！ー！」

どうやら俺はこの少女のせいで死んだらしい。

「えっと、、マジかよ（汗）」

~~~~お亡くなりになる前~~~~

「たったく暇だよなー」

俺は余りにも暇だったので新作のゲームのチェックをしに、

店へと足を運んでいた。「友達と遊べば？」とか言う奴は許さん！！

「なんか面白そうなゲームあるかなー？」

店の中で約1時間ほど商品を見回していたが、

特に気にいるものが見当たらなかったのとおりあえず

帰宅をすることにした。

帰宅途中喉が渴いたので飲み物を買い、公演のベンチで休んでいるところ

目の前でサッカーをして遊んでいた子供達の

サッカーボールが道路へとびだし、トラックが来ているのに気づかずその中の一人の少年はつられるように道路に飛び出した・・・

「へ？」

「ッ！あのガキッ！！」

~~~~~

そっか・・・俺

あの子供をかばってトラックにひかれて・・・

死んだのか。

「ねえ、そろそろいい？」

「ん？ああいいぞ」

(何か俺を殺しやがった少女が何かいつてきてらあ)

「アンタ今凄く失礼なこと考えたでしょ(ジトツ)」

「いや・・・別に・・・ソナナコトナイヨ(汗)」

「まあいいわそんなこと」

(じゃあ言つなよ)

「早速だけど、アンタを転生させるわ」

「ん、転生つてあれか？あのもう一度人生を楽しめる的な」

「そうそうそれぞれ」

うわー。まさしくあれだな。うん。

小説やゲームだな。・・・テンプレキタ

(。。(

!!

「・・・話を戻すわよ」

「お、おう、」

「早速だけどあんたには「リリカルなんちら」って世界に逝ってもらうわ」

「ふ〜ん。・・・ちょっと待て、行かす世界の名前知らねえのかよ！

てか、行かすのとこ漢字違くなかったか!!」

「あーうるさい。転生できるだけ有難く想いなさいよ」

(・・・あれ、コイツ最初とキャラ違くないか?)

「あー。有難う」

「べ、別にアンタのためじゃないんだからね!!」

(ここでツンデレかよー)

・・・有りだな(。)(キリッ)

「そんで、何か能力とかつてもらえたりすんの?」

「え?ああーうん。できるわよ、何か要望とかあるわけ?」

要望?そんなの有るに決まっているだろが!!

「とりあえず・・・魔力・気力のランクEX。武道の心得。十二の

試練。

アニメや漫画の全能力使用可能・・・まあこんなもんで」

「・・・結構あるわね。全能力使用とかは多分・・・てか、絶対に制限とかあるからね。それと、容姿とかは？」

「まあ制限あるだろうな。容姿ねえ・・・主人公たちと同じ年で、見た目普通で、

髪は黒、目は緑で、身長は高め、体は細めでよろしく！」

「・・・こ、細かいわね」

「まあなあー面白そおじゃん？」

「ハア・・・まあいいわじゃあ送るわね」

「あいよー」

ここから俺の新しい人生が始まるのか・・・

「あ、言い忘れていたけど、生活とかは自分でしてねー」

「えっ！（。。。うーうー）」

「バイバ～バイ」

「待てこら幼女

・・・」

「・・・さーてイビ○ジョーの太刀作るぞー」

って！デバイス渡すの忘れた・・・まあいつか」

No:01 終わり始まり(後書き)

次回は主人公のプロピールを紹介させていただきます。

設定（キャラ紹介等）（前書き）

全く人気が無い作品ですが、よろしくです。

設定（キャラ紹介等）

主人公（オリキャラ？・登場人物）紹介

名前：冷氷 無月（れいひょう むげつ）

身長：134センチ

体重：34キロ

性格：あまり人を好まないが、困っている人には手を貸す。

能力：チート（多過ぎる）

魔法・気力：ランクEX

・剣が好きで近接戦闘を好む。

無月「・・・出鱈目だな」

作者「すまん、あんまりアニメとか知らないから知っている分フル活用させるには

これしかなかったのだ」

無月「・・・お前貧乏だもんな」

作者「おい、その痛々しいような人を見る目はなんだ？」

無月「いや、かわいそ・・・なんでもない」

作者「お前今明らかに「かわいそうだから」とかって言っつもりだつただろ！！」

無月「・・・フウ」

作者「溜息をつくなー！ー！！」

無月「で、こんな会話でいいのかよ」

作者「いや、実はお前と敵対する奴も追加する」

無月「敵対？斬っていいのか？」

作者「それは、今後の展開次第だな・・・まあ殺させはせんよ（笑）

では、モブキャラの御紹介〜」

無月「・・・（コイツ遊んでやがる）」

名前：高町 秀哉 （たかまち しゅうや）

身長：131センチ

体重：31キロ

性格：女に目が無い（特に美少女）。自意識過剰。自己中心。

能力：特になし

魔法：ランクSSS （気力は神に頼まなかったため常人以下。）

・魔力Ⅱ強さだと考えており、見た目と魔力量だけは良い。

無月「・・・」

作者「・・・」

無月「コイツさ、ランクSSSまでしか絶対知らなかっただろ」

作者「全くもって同感だ」

無月「しかも能力：特になしって・・・ただのバカだろ」

作者「まあいいだろ。つってもどうしよっかなー」

無月「何がだ？」

作者「いや、俺ってさ原作知らないじゃん。どうやって物語を進めようかと・・・」

無月「・・・よくそんなので小説書こうと思ったな」

作者「いやー。楽しそうじゃね？」

無月「・・・こいつもバカか」

作者「なっ！作者にむk」

秀哉「いやー諸君、御機嫌よう。この小説の主人公の高町秀哉様だ
！！

ハッハッハー！！！」

無月・作者「・・・（うわぁー・・・）」

秀哉「どうしたんだい？愚民ども」

無月「チツ・・・おい作者、俺の武器はどうやって出すんだ？」

作者「ん？ああ。お前の影に出したい物を頭に浮かべながら手を突っ込んで

「来い」って出したい物の名前を言えば出せるよ」

無月「そうか・・・来い・・・斬月!!」

グワツ!!

秀哉「な、なんだその馬鹿デカイ刀は!」

無月「こいつは斬魄刀っていうんだよ。いくぜ。卍解天鎖斬月。

ぶっ飛べ、・・・月牙天衝!」

秀哉「え、ちよっ・・・う、うわああああー!!!」

ドッカーーン

無月「・・・(やっぱ刀はいいなノノノ)」

作者「・・・(さすがモブキャラ。扱いが・・・)」

無月「それでは、この小説を読んで下さっている読者様、続きはまた今度で」

作者「え!それは俺のセリフー!!!」

無月「早い者勝ちだよ。毗籠夢さん」

作者「んー。ならしょうがないな。では、また今度」

設定（キャラ紹介等）（後書き）

次回から本編に突入します。

原作を知らないので、原作崩壊引き起こしていきましょー！

転入生（前書き）

どーもー。全く読まれない小説の書き人眦篋夢です。
今回はタイトル通り、無月の転入日です。

転入生

無月side

(着いたか・・・)

そこは一室の部屋だった。

「まずは自分の能力をh「ハローツ」・・・」

「実はねえ実はn「どうせデバイスのことだろ？渡されていねえし」
・・・」

「むう~~~~まあいいけど。はい、これデバイス名前はアルフィン
でユニゾンデバイスだからね」

「・・・ああ」

「あなたが私のマスターですね。私の名前はアルフィンです」

「あー。マスターじゃなくて無月。俺の名前は冷氷 無月だ」

「了解しました。マスター無月」

「・・・無月だけで呼べよ」

「それじゃ私帰るねーばいばい」

「あーはいはいばいばい神様(幼女)」

「……ナニカイツタカシラ？」

「……何も言っていないです（汗）」

「さて、アルフィン学校に行くか」

「はい」

なのはside

今日は学校に来た時からいつもより少し賑やかだった。

「すずか、アリサおはよー」

「おはようなのは」

「おはよー」

「ねえ今日ってみんな騒いでいるけど何かあるの？」

「転入生だつてよこの学年に二人も」

「男の子かなー？女の子かなー？」

ガラガラガラ

「はい。みんな静かにー……よし。」

今日はこのクラスに男の子の転入生がやってきます」

生徒A「先生質問です！。その人はカツコイイですか？」

「うーん。かつこいいんじゃないかしら」

全員「おーーう」

「じゃあ無月君入ってきて」

コツコツコツコツ

「今日隣町から引越してきた冷氷 無月です。質問等は一切受け付けません」

人付き合いは苦手なのであまり関わらないでくださいよろしくお願ひします」

生徒B「おお、これは・・・／／／」

生徒C「なんか、Cool!!!」

「では、無月君の席は・・・高町さんの隣ね。

分からないことがあれば、高町さんに聞いてね」

「分かりました」

「わ、私なのは、高町 なのはって言います」

「・・・あぁ、よろしく」

(こいつ俺の今の自己紹介聞いてなかったのか?)

なのはside

(無月君こんなに露骨に嫌わなくてもいいのに)

・席について早々なのはから遠ざかる。

・なのはのことを無視(寝ている)。

・起こそうとしたら「うるさい」って言われるし。

(・・・はぁ(落ち込み中))

無月side

(なんなんだよこの魔王。俺の自己紹介マジで聞いていなかったのか?)

滅茶苦茶つかかってくるじゃねえかよ・・・ハア

「無月君・・・無月君・・・」

(うるせえ~~~~先生さんこいつをなんとかしてくれ・・・)

「ん?高町何を話している」

「ふえっ!いいえ、何でもありません」

「そうか・・・だったら金、銀、銅、水銀の化学式を答えろ(ニヤニヤ)」

「えっ!えつと・・・」

「・・・(カキカキカキカキ)」

スッ・・・

「え、無月君これを言えばいいの?」

コクッ

「どうした高町答えられないのか?」

「えっと・・・金 \equiv Au、銀 \equiv Ag、銅 \equiv Cu、水銀Hgです」

「!!!・・・いいだろう、座ってください」

「無月君、有難う!」

「有難うと思うなら、俺に関わらないでくれ」

「え・・・ごめんね」

「スースー（なんか高町の髪が垂れ下がった気がするぞ）」

（けど・・・私負けない!!!）

理科の授業中でした。

転入生（後書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「どうした？」

無月「あの高町とかいう奴を俺に近づけるな！そのせいでオチオチ眠れやしね

え！！！」

作者「あーそれは無理」

無月「なぜ！？」

作者「だってさ、一応原作キャラの女性ほとんどお前にくっつけるし」

無月「・・・・・・・・・・は？」

作者「ってことでまた今度〜」

無月「おいテメエーーーー！！！」

アリサの怒りと敗北（前書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「ん？」

無月「このタイトル不味くね？」

作者「まあタイトルだけだし気にしなくていいんじゃないかね？」

アリサの怒りと敗北

無月side

(畜生、なんなんだよあの高町とアリサっていつやつ)イライラ(

~~~~~回想~~~~~

4時間目が終わり、人々はみな、思い思いに御弁当を広げるのであった。

「なのはー御弁当どこで食べる？」

「教室？それとも屋上？」

「私は屋上まで行くの疲れるから教室がいいな」

(魔王と友達かける×2か・・・こいつらは教室で食べるらしいからな・・・)

俺は屋上で食べるか」

ガタッ コツコツコツコツ・・・

なのはside

「・・・・・・・・・・はぁ」

「どづしたの？なのは」

「いや、何でもないんだけどね・・・」

「無月君の事？」

「うん・・・理科の時間に助けてもらったから有難うっていったんだけど・・・」

「だけど？」

「「有難うって思っただったら俺に関わるな」って言われて」

「はあああ！！何あいつサツイテーーーー！！！！」

「ちょっとアリサ。そんなに怒らないでよ」

「いや、私あいつぶっ飛ばしてくる」

ガタッ！ タッタッタッーーーー

「あーアリサ！！」

「すずか追おう！！」

「うん！！」

~~~~~回想終了~~~~~

無月side

ここは屋上の端の方のベンチ

一人の少年が弁当を食べていた。

(ふうー。ようやく一人になった。今日は帰ったら能力テストだな)

そう思つて、食べ終わった弁当をかたずけていると。

バンツ!!

勢い良く屋上のドアが開かれた。

「あんたがなのはに酷いことをっ!!」

アリスは無月に殴りかかった……が、

「え？」

そこに無月は居なく、いつの間にかアリスは宙をまい地面に落ちた。

ドンツ!!

「うっ」

「なんだ……誰かと思えばバニ……女か」

「くっ、バニングスだ!! (全く見えなかった!?)」

「はぁ……面倒だな…… (これが武道の心得か……)」

「「アリサツ!」!」

アリサ s i d e

(なんなんだよコイツ。殴りかかったときには目の前に居たのに気づいたら

私が地面に叩きつけられて、あいつは私の後ろにいた)

「はぁ・・・面倒だな・・・」

(コイツツ!!)

「「アリサツ!」!」

「なのは!すずか!どうして二人がここに!?!」

「どうしてってアリサが無月君のところ走り出したから」

「コイツは・・・私がやる!」!」

無月side

「コイツは・・・私がやる!!！」

(はぁ・・・やべえ・・・斬りたくなってきた・・・これ以上は無理だな)

「お前たち。俺は自己紹介のとき言ったよな、関わるなって・・・」

「だったらなによ!!！」

「ちよつとアリス!!！」

「はぁ・・・まあいいや。・・・興ざめだな」

コツコツコツコツ

「!ちよつと、逃げるの!?!」

「俺に一撃でも入れられなかったやつがよく言つぜ」

「くっ・・・」

「じゃあな」

「待って!!!!」

なのはs i d e

「だったらどうしたら私たちとお話してくれるの？」

「ちょっとなのは！こんな奴ほっとけばいいのに！！」

「・・・だったら、魔法でも使って俺を負かしてみな」

コツコツコツコツ

(魔法！？そんなの・・・)

無月s i d e

俺は正直うんざりしていた、

高町は俯き、バニングスは睨み、月村はチラチラ窺っていた。

そして下校時間

(さてと、さっさと戻って能力テストだ！！)

そして、無月が自宅で能力テストをしている頃、

なのは小さな宝石を携えたフェレットと出会っていた。

なのはがフェレットと出会い、

そして

この物語は

動き出す。

変態登場!?

無月side

「なあアルフエン」

「なんですか無月」

「俺の能力つてさ、お本当にチートだな」

「そう……ですね」

俺たちは今、近くの林に結界を張って

その中で能力テストをしている。

「やっぱりボンゴレはいいよなー」

「無月?」

「いや、何でも無い」

今俺が使っている武器は……

(大空のリングVer.X……これは凄まじい炎だな……)

「ガウツ」

「ナツツ、カンビオ・フォルマ モード・アタッコ

ミテ・ナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ」

「ガウツ!」

「え、ええええー!!!猫ちゃんがガントレットに!?!」

「あー、まあこういうものだから気にするなアルフィン」

なのはside

「これが……魔法」

「そうだよ、そして君には魔法使いの才能がある。
僕のために力を貸して欲しい」

そしてここでは、未来の魔導士エース

高町 なのはとそのデバイスレイジングハートが揃った。

無月side

(ふむ、何事かと思えば、高町が魔法使いに目覚めたか・・・)

「無月さん、取り敢えず道路とかを元に戻したほうがいいかと・・・」

「そう・・・だな。来い、タイム風呂敷　！！！！」

「・・・それはドラエム(それ以上は言うてはいけない!!)・・・」

「まあ、取り敢えず直すか」

なのはside

(この魔法を使えば無月君に話を聞いてもらえる・・・

まっつてね!!)

決意を新たにしたなのはだった。

無月side

今は学校、と言っても俺は寝ている。

(・・・よし、早退しよう!!)

思い立ったが吉日という訳で荷物を整理していると・・・

「無月君！ちよっとお話があるの・・・」

「……何のようだ」

「この前……屋上でした約束のこと覚えてる？」

「……ああ、お前が魔法でも使って俺に一撃でもあえたらお話しやる」

「っていう内容だったな」

「約束は守ってね」

なのはは真っ直ぐに見つめてくる。

「ああ、約束は守る」

そして俺は帰ろうとしたのだが、

「って！無月君！なんで帰ろうとしているの！？」

「暇だし、眠いし、面倒だから」

「でも、帰っちゃだm「いいわよそんな奴」あ、アリサちゃん！？」

「別に帰りたければ帰らせればいいじゃない」

「ちょっとアリサちゃんs「お前の指図なんていらねえ俺は俺で勝手にする」

無月君まで何言っているの！」

そして無月は早々と教室から出ていった。

「無月君・・・」

なのは何か呟いていたが、無月の耳には届かない。

無月は帰宅途中にある公園のベンチで考え事をしていた。それは、ジュエルシード集めをすぐに開始するか、それとも、戦闘能力をあげる訓練をするかという内容だった。

「ん？これは魔力反応か、月村とか言う奴の方からか・・・
ジャミングコートを着れば戦ってもばれないだろ」
そして無月は目的地へ向かった。

なのはside
なのは達の前にはジュエルシードを持った黒い格好の少女と使い魔らしき人物がいる。

「そ、そのジュエルシードを渡して！」
「これは、私たちに必要なもの・・・だから渡せない」
「それは危険な物なんだ渡してくれないか？」
「誰がアンタ達何かに渡すものか！！」
「なのは！俺も手伝うぜ！！」

私とユーノ君の前に見た目はカッコイイけど、何か目がいやらしい男の子が出てきた。

「俺の名前は高町 秀哉だ同じ高町どうし仲良くしよんぜ」

(ねえユーノ君)

(何？なのは)

(知り合い？)

(全く知らない)

「ちなみに俺様の魔力量のランクはSSSだぜ！凄いだろー！！」

「「「SSSS!?!?!」」」

なんか凄いけど目線がいやらしくて
嫌な感じの男の子が現れた。

月無side

(さて・・・フェイトがなのはとの仲が良くなるまでは

ボンゴレギア(VG)で戦って、その後ハヤテが仲間になるまでは
刀で戦うか・・・)

「ん？アルフィンなんだあの高町の近くにいるSSSランクの魔導
士は」

「分かりません、先程突然現れました」

「チツイレギュラーか・・・あいつ、フェイトに攻撃していやがる
な」

「どうしますか？無月」

「もち」

無月はリングと毛糸の手袋を装備した・・・

「さあ、初陣だ!」
「はい!」

???

「くうっ!」

「フェイト!」

(私の前に現れた目線が気味悪い男の子は正直
魔力の使い方は悪いけど、魔力が高くて一撃が強い!)

「フェイト大丈夫かい!」

「うん、まだ行ける。バルディッシュ!」

そのとき私はあの男の子から目を離してしまい
気づけばあの子が撃ってきた魔法弾が私に当たるところだった

「フェイトー!」

(やられる!!)
思ったそう。けど、どこも痛く無かった。
ゆっくり目を開けると・・・

「ッ! テメエーは誰だ!」

「俺の名前? そうだな・・・ボンゴレとでも名乗っておこう」

無月side

(あつぶねえ・・・もう少ししてフェイトに当たるところだったじ
やねえか)

「おい、テストロッサ怪我は無いか？」

「え・・・はい。怪我は無いです。助けてくれてありがとうございます」

「テメエ・・・俺の邪魔をすんのか？」

「ああ俺にとつてはお前みたいな変態は手に取る程じゃないが、

まだテストロッサには早いのでな」

「おいお前！フェイトがあんな餓鬼に負けるとでも言うのかよ!？」

「餓鬼？あいつはテストロッサと同じ年だよ」「消えろー！ー！ー！

ー！ー！」「チッ」

あの変態がいきなり斬りかかってきやがった。

「まあいいか。行くぞ変態」

「テメエ・・・殺す!！」

そして、変態（秀哉）VSボンゴレ（無月）の戦いが始まった。

無月はリミッターで魔法ランクEX Dまで落としている。

秀哉はリミッターは付けてないためSSS（付け方が分からない）

変態登場！？（後書き）

無月「あの変態め・・・」

作者「あれ？お前もしかして、フェイトにほ」

「極限サンシャインカウンターー！！」

「ふぎやあああー・・・」

無月「ではではさよならーの前に、」

「どうやらこの作者は課題やら仕事に追われるため

更新日時が遅くなります。では・・・」

無月・作者「良いお年を〜〜」

なのは・フェイト（私たちっていつになったらここに出れるのかな？）

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)(前書き)

作者「いやー前話ではいきなり斬りかかれて正直驚いたねー」

無月「別に・・・あいつ動き遅かったし」

作者「まあお前の設定がモロにチートだからなー」

無月「・・・(こいつが考えたんだよな)」

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)

無月side

「・・・おせえな」

(なんだこの変態。魔力が馬鹿デカイだけで戦術のパターンが少ない上に

直線的な攻撃に雑な剣術・・・舐めているのか?)

今はボンゴレ(無月)と変態(秀哉)が戦っていた。

(魔法弾と剣。少しは楽しめると思ったのだがな・・・)

「どうだああーこの俺様の力わよおおー!!!」

「黙れ変態。・・・そうだな、そろそろ飽きてきたしな・・・」

無月がそう言うと、毛糸の手袋が光り輝き、赤が重視されたグローブに姿が変わった。

「おい、テメエ・・・なんだそのグローブ」

「俺の武器だよ。変態」

「チッ!!!」

(相手の剣は・・・なぜに金色なんだ?)

そう、変態の剣は金色だった。

「死ねえええ　　!!!」

「・・・こいつ弱いな」

なのはs i d e

突然現れた黒いコートを着た少年。

魔力はあまり感じられないけど、すごく強い。

(凄い、魔力の差が物凄くあるのに、秀哉君を圧倒している!?)

「負けられない・・・私たちもはじめよう」

そして、私は私の戦うべき相手と向き合った。

無月s i d e

「お前弱いな・・・(今の俺くらいまで魔力落としているんだけどな)」

「チツツツ!!!」

(なんなんだよこいつ!魔力は明らかに少ないのになんだよこの強さはよ!!!)」

「向こうも終わったみたいだし、そろそろいいかな・・・」

「この俺が主人公!俺が最強なんだよ!!俺は負けないんだよ!!!」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

「ッ!!!」

秀哉s i d e

(見えなかった)

俺様は強い、この強さでなのはやフェイト、はやてと叫びたかわいい子たちを

メロメロにして俺様の虜にするつもりだった。

(それなのになんなんだよ！いつ、強い、強すぎる！！)

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ！！」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

そうあいつが言い放ったとき、俺の目の前からあいつの姿は無かった。

「ッ！！！」

そして、目の前が真っ暗になった・・・。

フェイトside

「・・・凄い」

(私のソニックフォームの最高速度を軽く越してる速度で、相手の後ろに回り込み、

的確に相手の意識を剥ぎ取っている！？)

「どうやら勝てたみたいだね」

「ふえ！あ、はい／／／」

いつの間にかフェイトの隣にボンゴレが居た。

(驚いて変な声出しちゃったよ～～／／／)

「まあいいよ、それじゃ俺は帰るから。体に気をつけるよ」

「え・・・はい、ありがとう」

そう言うと彼は少し微笑んで？消えた。

(一体なものなんだろう？どうして助けてくれたのかな・・・？)

無月side

家に帰宅後・・・

「今日は大変だったなアルフィン」

「何言ってるんですか無月。私今回の戦闘でなにもしていませんよ」

アルフィンは少し拗ねてる。

「別に今日の相手は弱かったからね」

「そうですね、魔力だけ有っても効率良く使えないのであれば宝の持ち腐れですね。秀哉という人にピッタリです」

「・・・なあアルフィン」

「なんですか？」

「お前怒ってるだろ」

「・・・い、いえ」

(・・・今の空白の時間はなんなんだよ!?)

少し怒っているアルフィンでした。

「あ、そうだ！」

「どうしましたか無月？」

「おーい可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様出てきてください」

「？出てくるわけな」呼んだー？」・・・ありましたね」

「実はさっしだけ能力を追加して欲しいんだけどいいかな？」

「いいよー。この可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様に
お願いしてみなさい（エッヘンツ）」

「……………じゃあお願いなだけどさ……………」
そして俺のチート能力が増えた。

「てか、意外と簡単に能力追加してくれたな」
「良かったですね無月」

「まあこれで俺が負けることなんてあまりないだろ」
「……………（まず、攻撃くらうのですか？）」

~~~~~結果~~~~~

無月VS秀哉……………勝者：無月  
なのはVSフェイト……………勝者：フェイト

「そおいえば、アニメや漫画の能力フル活用できる時点で、別に頼  
まなくても

能力発動出来たんじゃね？」

「……………無月さん……………（今頃ですかぁ……………（疲））」

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)(後書き)

無月「弱かったなーあの変態」

作者「まあ能力無しの変態で、魔力バカを目指したからね」

無月「ふーん・・・何か酷いな」

作者「黙れ、このフラグメイカーめっ!!」

無月「・・・ルーン文字ハカノッ!!」

作者「あぢいいいいー!?!」

ルーン文字ハカノッは松明!!炎を示します。

なのはと無月 はじめの出会い(前書き)

作者「なあ無月」

無月「なんだ」

作者「なんでさ、せっかくのユニゾンデバイスなのにアルフィン  
人の状態にしないんだ？」

無月「分からないのか？どうせお前が俺とくっつけよつとするから  
だろ」

作者「・・・(やべえ、ばれてる(汗))」

## なのはと無月 はじめの出会い

無月 side

「温泉？」

教室でいきなり話かけられたと思ったら

高町に「温泉に行こうと誘われた」。

「いや、俺はいい。それに俺はその日予定がある」

「え、そうなの・・・ごめんね忙しいのに」

「・・・」

俺は未だに高町のことを理解できなかった。

いや、理解したくなかった、しなかったの方が正しいだろう。

(それに、温泉ってことはフェイト達と遭遇するわけ・・・か)

キーンコーンカーンコーン

「本当は温泉に行った先でも会うのだがな・・・」

俺の眩きは誰の耳にも届かなかった。

なのは side

~~~~今は御弁当タイム~~~~

「なのは！どうしてあんな奴を温泉に誘ったりなんてしたのよ!？」

「アリサちゃん落ち着いて」

「落ち着いてなんかいられないわよ！私はいつが嫌いなもの！」

「私は嫌いじゃないんだけどな……」

「なのは無月君のどこがいいの？」

「……うん、ちよっとね。うち、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で

大怪我しちゃってしばらくベットから動けななかったことがあるの。

喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったから、お母さんとお兄ちゃんは

いつもずっと忙しくてお姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから私割りと最近

まで家で一人にいること多かったの。そんな時に無月君と出あったの」

「ん？ちよっと待って。あいつは最近になって転校してきたのよ。

なんでそんな奴と出会ったの？」

「うん、それはね……私がある頃、家に居ても一人だったから公園で遊んでいたの、

その時にね足をくじいて動けなくて、辺りも暗くなって、一人で泣いていたの。

そんな時に無月君と出会ったの」

「初めは怖かったけど、心配してくれて、優しくして、それだけで安心できて、

私はいつの間にか泣き止んで、笑っていたの」

「……」

「そして、泣いていた理由を聞かれて、答えたの」

「それで、あいつはなんて言ったの？」

「「一人で抱えこまなくていい。一人で悩まなくていい。人は独りでは

生きてはいけないんだから。お父さんの怪我が治ったらいっぱい甘えなっ！」って

私はその言葉を聞いてまた泣いちゃったんだけどね。私が泣き止むまで傍に居てくれて

その後家まで送ってもらったの」

「ふーん。昔はあいつそんな奴だったんだ・・・今じゃ考えられないわね」

「でも、元はいい人なんだよ！きっとその後何かあったんだよ・・・」

「そっか・・・」

だから、私はあの約束を受け入れて、「お話」をさせてもらうんだから!!!

無月side

「くしゅん！」

「無月かぜでもひいたのですか？」

「いや、そんなわけないのだが・・・」

（なんて言うか嫌な予感がしたというか、寒気がしたというか・・・）

なんだかんだで意思疎通？ができている二人であった。

「そっか・・・もうすぐで温泉イベントがあるのか・・・」

「いきたいのですかマスター？」

「マスターは止せて・・・いや、その温泉に行った先でテストロツサと高町

がエンカウトすんだが、多分あの変態野郎も出てくると思うし、もう少しV.Gの扱い方を正確にしておこうかな」

「ふふっ・・・まあマスターならなんとかかりますよ。っということは

マスターも温泉に行くのですか？」

「・・・アルフィン・・・そこまで名前で呼ぶの嫌だったのか・・・。温泉にいくと言っても、あいつらと遭遇するようなへまはしない。それに変態と戦えば、今の高町やテストアロッサでは勝つのは難しい」

「だからマスターが戦う・・・と。」

「・・・（もう、突っ込まん）」

「いいのではないですか？」

「え？」

「それがマスターのやりたいことならいいのではないのでしょうか」

「・・・ありがとなアルフィン」

「いいえ」

（それにしても、あの変態と戦ったとき、グローブのVerをXではなくVにしておけば奥の手に出来たんだがな・・・少し失敗したな）

「まあいい。戦いの時まで俺は武器の使用チェック等をする」

「かしこまりましたボス」

「・・・もう好きに呼んでくれ（涙）」

「では、ダーリン「それは無理だ」ええー・・・」

「名前がマスターにしてくれ・・・」

「ではご主人様で」

「話を聞けーーーーー!!!」

なのはと無月 はじめの出会い（後書き）

作者「・・・何かアレだな」

無月「ん、なんだ？」

作者「お前の予定の性格がずれてきているなあって」

無月「・・・（ブチッ！）頭・・・冷やそうか」

作者「・・・」 ; ; ; 「

無月の怒り（前書き）

作者「……………」

無月「どうした？今日はやけに静かだな」

作者「いや、次のバトルでどんな装備を使わせるか迷っていてな」

無月「！お前がそんなまともなことを考えていたとは！！」

作者「……………バカにしてる？」

無月の怒り

無月side

「まあこんなもんでいいか」

俺が今装備しているのは

・嵐のボンゴリング+SYSTEMAC・AIの開匣に必要なリングx4・大空のリングVer.X
・雨のネックレスVer.X・雲のブレスレットVer.X・霧のイヤリングVer.X
・シモンリング(大地・氷河・森・山・砂漠)・ボンゴレボックス・時雨金時。

(雨のネックレスと時雨金時は最終手段だ。まあ今回は使わないだろうが)

俺はジャミングコートを羽織る。

「よし・・・行くぞアルフィン！」

「はい。無月」

秀哉side

(うっひっひっひっひっひっ)

今日はなのは達が温泉に行く日だな

俺の認識障害の結界と視力強化を使えば・・・

ひゃうぶ~~~~~のぞける~~~~~)

「うぶうぶうぶ ぶっぶっぶ~~~~~」

「ママー変な人が居るよ」

「こら、見てはいけません！」

（はあ〜〜愛しの人達の・・・ふふふ・・・）

変態は、どこに行っても、変態だった。

なのは・フイトside

（何か今ものすごい〜〜〜く悪寒が走ったんだけど・・・）

二人の脳裏に高町 秀哉の顔が浮かぶ

（（結界張っておこう））

無月side

旅館の近くの林の一角

（そろそろか）

無月が目を覚ました頃には辺は暗くなり、
ロストロギアの反応と魔力の反応があった。

「アルフィン準備はいいか？」

「はい、いつでも」

「行くぞ！」

そして、無月の手袋の形が変わった・・・

フェイトside

「うっ・・・」

「フェイト!?!」

最初は誰も居なくて順調にことを運んでいたのに、

また、この前と同じ嫌な目線のこと、白いアジャケットの女の子、その子の使い魔らしいフェレットが現れ、ジュエルシードの封印を邪魔されてしまった。

「なあフェイトちゃん」

嫌な目線の男の子が話かけてきた

「君が僕の物になれば、ジュエルシードをあげるよ」

「!?!」

何・・・言っているの、あの人は・・・目線が・・・怖い!!

「フェイト!そんな奴の言葉なんか聞くな!!」

「黙れよ犬風情が」

男の子がそう言い放つとアルフの周りに魔法弾が・・・

「消えな」

「アルフ!!」

アルフが危ない!!そんなとき・・・

「さっきから黙って聞いていれば・・・お前ごとき雑魚が

調子に乗ってんじゃねえぞ・・・」
「え?」

その瞬間。嫌な目線を送っていた男の子が地面に叩きつけられていた。

「がはっ!」

無月side

(・・・この変態は・・・本当は斬りたいが、斬撃は闇の書のとくに使うからな・・・今回は大地の力で地べたに這い蹲らせてやるよ)

「フェイト・アルフ大丈夫か?」

「!あなたはボンゴレ!? 助けに来てくれたのかい!」

「ああ本当はもう少し早く来たかったんだが・・・ちよつとな」

寝ぼけて遠回りしてしまったとは言えまい。

「テメエ・・・ボンゴレ・・・俺様の邪魔を・・・」

「フェイト」

「は、はい!」

「あんな奴の言うことをまにつけるな」

「え?」

「まあいい・・・お前は向こうの白い奴女の子と戦ってこい」

「う、うん。行ってくる」

「ぶっ・・・頑張ってこい」

(ミスったー!。フェイトって呼んじまった・・・。まあいいか、

あいつも別に気にしてないだろ。それはともかく……)

「さて……ここから先は一方通行だ。

俺を倒してみな」

……俺ってアクセラレータになれるんじゃない？

フエイトside

(どうしてあの黒い服を着た男の子は私たちを守ってくれるのかな?)

「ねえ、アルフ？」

「さっきの黒服の男の子のことかい？」

「うん」

「あたしは信じるのはまだ早いと思う……けど」

「けど？」

「あのさっきの変態と今のプレシアよりはマシだと思っよ」

「うん……そう……だね」

お母さん……

「フエイト……私たちも戦っよ！」

「うん！」

なのはside

(やっぱり……私を感じていたあの嫌な視線は当たっていたんだ。

私が……もし、襲われたら……あの黒服の男の子は

助けて……くれるのかな)

「何考えてるんだろ・・・私」

「なのは、くるよ!」

「うん、わかってる。私達も戦うよユーノ君!」

強くなる!そして・・・

「フェイトちゃんや無月君とお友達になるんだから!!!」

無月の怒り（後書き）

無月「なあ・・・」

作者「ん？なんだいワトソン君」

無月「（あえてスルー）これさ、明らかに

フェイトのフラグ立てる気だよな・・・お前」

作者「ナンノコトカナ？」

無月「・・・ポイズンクッキング どうぞ、召し上がれ」

作者「え・・・ちよつ、おま・・・ガハッ」

バタッ！

作者は星々の仲間入りを果たしたのであった。

戦闘開始！～能力テスト～（前書き）

無月「さぁーで、今日は能力テストも兼ね備えて、ちと暴れるぜ！
」

作者「まあ・・・ほどほどに・・・なっ
」

無月「~~~~~
」

作者「（怖くて口出し出来ねええー）（・・）（（

戦闘開始！〜能力テスト〜

無月side

「さあーで、最初から上げていくけどいいよな？」

まあ断られても上げるがな」

「はあはあはあ……」

無月は戦闘開始とともに大空のVGと大地のシモンリングを発動し、圧倒的な機動力で

秀哉を翻弄し、大地の重力で相手の機動力を大幅に削り取っていた。

「はあはあ……テメエ……なんだその力は」

「お前程度に教える義理はねえぞ雑魚が……」

「テメエ……調子に乗ってんじゃねえぞおおおー！！！！」

（遅いって弱い……そして脆い）

秀哉が突っ込んでくるが、大地の重力で地面に叩きつける。

「ガハッ！」

（はあ……そろそろかな）

「大空のVG・大地のシモンリング解除」

無月がそう呟くと、無月の手や太もも当たりを纏っていた防具と、額に灯っていた炎と秀哉を抑えていた重力が消えた。

（次はこれだな……）

「来い。瓜、開匣」

ボックスの穴に指輪から出ていた真つ赤な炎を注入した。

「ニヤウーン！」

「なっ!?!」

「カンビオ・フォルマ
形態変化」

「ニヤアアア!!!」

瓜と呼ばれた猫は「カンビオ・フォルマ」と聞くと、
無月の左腕の武器の一部となった。

それは、荒々しく吹きあれる疾風と謳われた・・・

「Gの弓矢」
ジーのアーチエリー

秀哉 side

おいおい、こいつはどういうことだ!?!

いきなり猫が現れたとおもいきやあいつの武器になりやがったぞ!?!

「おい・・・何をしやがった・・・」

「お前に教える義理はないと言ったる？」

そして・・・これで吹き飛ば・・・」

あいつは、弦を引っ張り、溜めると・・・

「赤竜巻の矢!!!」
トルネード・フレイムアロー

バカデカイ一撃が俺に向かって放たれた。

溜めが少し長かったため、俺はなんとかギリギリで回避に成功する

ことができた。

「ふっ。今の技は少しばかり溜めるのに時間がかかるんだね」

「そうだな。だったらどうした！

果てる！ガトリングアロー！！」

数発の矢が俺に向かって放たれたが、

「ふっ。防御！！」

このぐらいの威力なら、俺のデカイ魔力を守りに回せば防げる。
ニヤリ。つい、笑ってしまった。

「ああーわり、今のお前の顔見たらちとイラ付いたわ・・・

ねえ、変態・・・」

「ああ。な」

「噛み殺すよ・・・」

俺が言い終わる前に言葉を遮られ、
その瞬間あいつから、物凄い殺気が俺に向かって放たれた。

無月side

(やべー・・・ちと殺気出しすぎちまったか？

まあいいや。あの変態のおかげでこっちは能力のテストが出来る
んだからな)

「お前・・・死ぬなよ」

「・・・は？」

俺はさつきとは色の違うボックスを出した。
そして違う色の炎をまた注入した。

「おいでロール、開匣」

ボックスから出てきたのはハリネズミだった。

「クピ」

「ロール、カンビオ・フォルマ」

「クピイーーーー!!」

「追加だ、シモンリング氷河・森!!」

そして俺は、鋭い葉と氷の葉を纏った。

「さあ始めようか。ワンサイドゲーム（一方的な虐殺）を・・・
（まあ殺しはしないけどな）」

秀哉 side

なんなんだこいつ、最初はグローブ、次は弓、そして次は・・・

「なんだそれは・・・トンファアと防具と・・・お前が纏っているのはなんだ？」

「はあああー・・・お前さ・・・3度目だぜ」

お前に教える義理は無い」

そこからは凄かった。あいつは動いてもいないのに

俺の体は「何か」によって体中を切り裂かれる。

「ぐわああ!!!……………ぜえぜえぜえ……………なんなんだよこいつ!……………」

（攻撃が……………見えねえ……………）

「ふむ。遠距離は大丈夫だな。てか、マジ切れ味スゲー。……………次はこれだ」

あいつはそう言い、トンファーを構える。
その瞬間……………

「消えた!?!」

「遅いよ君。……………遅すぎる」

あいつは俺の懐に潜り込んでいた。
そして物凄い速さで俺に攻撃を打ち込む。

「ガハツツ!?!」

（こいつには……………まだ……………勝てねえ

俺の……………ハール……………ム）

そして、意識が途切れた……………

無月side

（チツ!もう気絶したのかよ。かなり手加減したんだけどな……………。まあある程度データもとれたし、次はヴァリアーリングを試すか……………）

「ん、向こうも終わったみたいだな」

「そのようです。マスター」

ふと、なのはとフェイトの方に目をやると
フェイトとアルフが遠くに飛行していた。

「俺も変えるか。そお言えば、孫悟空みたいに瞬間移動できるのか
な？」

「試してみてもいいかがですか？」

「あ、いや第8の属性の炎を使ってみる」

「第8の属性の炎？」

アルフィンに尋ねられたが、見せた方が早いと判断に、
手を前に出し、

「開け」

そう呟くと、空間に穴が空いた。いや、炎によって作られた。

「行くか」

この場から立ち去ろうとしたとき

「あ、あのー!!」

声をかけられた……………はあ

戦闘開始！〜能力テスト〜（後書き）

無月「……………（イライラ）」

作者「（ああ。相手が余りにも早めにのびちまったから怒っているなありや……………」

無月「はあ……………やりたりねえなあ……………」

作者「やっぱりかああ—————!!!!」

番外編（前書き）

明けましておめでとうございます。

……*Happy-New-

Year*……

番外編

全員「新年明けましておめでとーございます」

アリサ「いやーもう2012かー」

すずか「なんか慌ただしい年だったねー」

無月「そうか？俺はのんびりやっていたけどな」

なのは「私も私もー」

作者「いいよなー小学生は・・・」

アリサ& amp ;無月「あぁん！！（怒）」

作者「し、しょうがないだろ！こっちは受験だし、仕事あるし

課題だつて沢山あるんだからよ！！」

無月「それは冬休みに入って小説読んでいた時間8割はあるよ

作者さんやい」

作者「・・・そ、それは・・・ねえ」

アリサ「自分がやらなかったからって小学生に当たらないでくれな
いかしら！」

作者「（グサグサッ）」

作者のライフは312削られた。

無月「てか、8割小説読んでるって・・・根暗か？」

作者「（グサグサグサッ）」

作者のライフは864削られた。

作者「いいもん、いいもん・・・グスッ」

アリサ「・・・そんなだから彼女ができないのよ」

ドッカーーン！！

作者にクリティカルヒット。作者のライフは3648削られた。

作者は死亡した。

アルフ「なにしてるんだい？」

作者「アールフー！！！」

ぎゅっ

なのは・アリス・すずか「「「あああ！！！」「」」

アルフ「ちよっと！何するんだい／＼／」

作者「うっうう。アリサと無月がオラをいじめるんだべさ」

無月「・・・(だべさ!?)」

アルフ「おーそうかいそうかい。よしよし」

作者「アルフリーー!!!」

無月「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

ウエニアント・スピリトゥス、アエリアーリス・フルグリエンテース

(来 た れ 雷 精 、 風 の 精)

クム・フルグラティオーニフレット・テンペスター

(雷 纏 い て 吹 き す さ べ)

アウストリーナ ヨウイス・テンペスター・フルグリエンス!!

(南 洋 の 風) 【 雷 の 暴 風 】 !

ドカアアアーーーーー!!!!!!

なのは・フェイト「・・・」

無月「ふーん。まあこんなもんだろ」

作者「ああ・・・アヴァロン・・・よ・・・」

なのは(年末そうそう大変だったの)

アリサ(さすがは原作崩壊作品ね)

作者「それでは、皆様!今年度も~~~~」

全員「良いお年をー!!!」

番外編（後書き）

今年もよろしくお願ひします。

少しの会話（前書き）

無月「そういえばさ、俺って修行したら自分固有の技とか
習得出来るのか？」

作者「ああ。できるぞ」

無月「そう……か」

作者「……？」

少しの会話

なのはside

負けた。またあのフェイトちゃんに負けた。

名前は教えてもらったけど、私の名前は聞かずにどこかに行っちゃった。

「……………」

「なのは……大丈夫？」

「ユーノ君……うん……私は平気」

穏当はかなり落ち込んでいる。フェイトちゃんには負けて、ジユエルシードは取られ、名前は聞いてもらえなかった。

(私どうすればいいんだろう……)

ドゴオオン!!

そんなとき、別の方から大きな音が聞こえた。

どうやら、男の子同士の戦いも終わったみたい。

途中から現れた男の子が立っていた。

「なのは、あの子からフェイトについて何か聞いてみよう」

「え、う、うん。分かった」

私は急いで彼の元に向かった。

「あ、あの!!」

なんとか、彼がこの場から立ち去る前に話しかけることができた。

無月side

「あ、あの!!」

俺はこのとき嫌な予感がした。そのまま無視して転移してもよかったのだが、

その後が面倒になるかもしれないので話を聞くことにした。

(はぁ面倒だな・・・)

そう思いつつも、

「なんのようだ?」

なのはside

話かけたのはいいけど、聞きたいことが沢山あって私は戸惑ってしまった。

「え、えっと・・・あ、・・・えっと・・・」

「ねえ君」

「ゆ、ユ一ノ君!？」

「君のその力はなんだい?魔法ではないようだけど」

「ん?ああこれのことか」

そう言つて彼は両手の指輪を私たちに見せてきた。

「それはなんだい?」

「別に。お前には関係ないよ」

「あ、あ、あ・・・あの!!!!」

無月side

(ああーだりいー)。早く帰って次使う武器を確認したいんだけどなあ……)

そんなことを考えていると。

「あ、あ、あ……あの……!」

いきなり高町が大声で怒鳴った。

「え、えと、大声出してすみません!」

「別に気にしてない」

(謝るんだったら早く帰らせてくれ)

「わたし、私高町 なのはって言います!」

あれ?自己紹介まだしてなかったっけ?

「あなたはボンゴレさんでいいんですか?」

「ああ俺はボンゴレだ」

まあ偽名だけだな。

「ボンゴレさんはなんでフェイトちゃんを助けているの?」

「それは簡単。あの変態から守るため」

そして俺は気絶している(笑)秀哉(変態)を指さした。

「そうなの・・・だったら、ふえい「フェイトのことが知りたければ自分であの子に聞きな。それが無理なら諦めな」貴方はフェイトちゃんの何を知っているの?」

「うーん。ぶつちゃけ、ほとんど全部知ってる」

「えっ・・・」

「でも、それは俺の言うべきことではない。君が心から何かを望み、行動すれば

「自ずと答えは見つかる」

そろそろ潮時かな

「え、それってどういうク」じゃあな「あっ!ちょっと待って・・・」

そして俺はゲートをくぐった。

「・・・マスター」

「どうしたアルフィン」

「やはりマスターは優しいんですね」

「・・・俺がか?・・・」

「くすっ・・・」

なのはside

「行っちゃった・・・」

「それにしても彼・・・ボンゴレのあの力は一体何なんだ」

何か、ユーノ君がぶつぶつ呟いているけど、

私はそんなことより

ボンゴレ君を・・・フェイトちゃんをもっと知りたいと思った。

「それにしても彼は一体どうやって、どこから動物を召喚し、どうやってそれらを自分の武器に変換して装備しているのだ？」

今のユーノ君

正直……怖い。

秀哉 side

「ん……はっ！俺はどうしていた」

俺は驚いて立とうとしたが

「ツツツ!!」

身体中が傷だらけで、座り込んでしまった。

「あのボンゴレとか言う奴のせいか……あのやるう……
今度あった時こそ……殺す!!」

そしてその時こそフェイトとなのはをこの手に……ニヤッ

「つと、傷治さないとな……ウイルス」

「なんのようだ」

「おいおい、マスターに向かってその口調はないだろ」

「少なくともボンゴレみたいにデバイス無しであそこまで強くなれたら

考えてやる」

「そっかぁーデバイス無しでかぁー……って！デバイス無し!？」

あいつ、今までデバイス使って居なかったのかよ!？」

「ああそうだが」

(デバイス無しでこの強さ・・・あいつやっぱり・・・転生者か)

まあ転生者がなんだろうが、俺のハーレムの邪魔をするなら潰すまでだ!!

少しの会話（後書き）

無月「なんだ、あの変態まだハーレム夢みていやがるのか」

作者「まあ俺が残念系で設定しているからな（、*）」

無月「……（こいつは酷いな）」

作者「何か言ったかい？」

無月「……別に」

すれ違い(前書き)

無月「……………」

作者「お前が悩んでいるなんて珍しいな」

無月「まあな……ちよつと……な」

作者「まあ俺にはあんましわからないが、とにかく頑張れよ」

無月「ふっ……すまん」

すれ違い

無月side

「いい加減にしなさいよ！」

俺はその大声で夢から覚めた。

「この間からつわの空でボートして」

「ごめんねありさちゃん……」

「ごめんじゃない！あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボートしてなさいよ！！いくよすすか」

教室から出ていくアリサ。

「あ、アリサちゃん……。あ、なのはちゃん」

「いいよすすかちゃん今のはなのはが悪かったから」

「そんなことないと思うけど、」

取り敢えずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね」

「ごめんね」

アリサを追いかけるすすか。

「怒らせちゃったな……。ごめんね。アリサちゃん」

「……高町はそれでいいのか？」

「え？」

「確かに、どんなに仲のいい親友同士でも、

隠し事ぐらいは1つや2つは誰にでもある」

「……」

「でもさ、俺は、それはそれで良いと思うよ」

「・・・？」

「高町達は親友同士なんだろう？大切な友達なんだろう？そんな仲が隠し事ぐらいで

ぐらいで壊れたりするわけないだろう？どうせバニングスのことだ、高町が自分の話を聞いていないことよりも、自分たちに相談してくれない事に怒っているんじゃないかな？例えばぐぐとかから始めて、自分の気持ちを伝えないよ。大事な友達なんだろう？もし、話しくいことなら、もう少し待ってほしいとか言って謝ってこいよ。お前らしくねえぞ」

「無月君・・・うん。分かった。ありがとう」

教室を出ていく高町

「ふう・・・俺って案外お人好しなのかもな・・・」

「そうだと思いますよ、マスター」

なれねえことはしない方がいいな・・・。

・・・よし、家に帰るか。

そして、身支度を整え始める。

（まだ昼過ぎか・・・公園で昼寝でもするか）

（あれ？いつの間にか暗く・・・って！

確かこの時期は街中でジュエルシードが暴走するイベントが！

くそっ・・・間に合えよ！..」

フエイトside

「止まれ・・・止まれ・・・」

「フエイト!!」

私がこのジュエルシードを止めないと・・・
母さんのために・・・母さんのために・・・

「フエイトよくなって!フエイトの体が!!」

「全く・・・お前はバカだな」

「・・・え?」

「あんたは!?!」

そう、また彼だったいつも私を助けてくれる人。
いつの間にか傍にいて、いつの間にか居なくなっている。
そんな・・・人・・・。

「俺も力を貸してやる」

彼はそういい、私の手に手を重ねて着た。

「「止まれ止まれ止まれ止まれ!!」」

そして、ジュエルシードの光が納まっていく・・・

「良かった・・・た・・・」

私はそこで気を失った。

無月side

あつぶねえーてか、ついたときにはジュエルシールドが暴走してたし。

「おつと」

多分疲れたんだろうな。

気を失ったフェイトを支え、頭を少し撫でてからぞくに言うお姫様抱っこをした。

「アルフ！早く俺をお前たちのアジトへ案内しろ」

「お前、何ってるんだい！」

「大丈夫だ、フェイトの怪我は俺が治す」

「そんなの信じれるわけないだろ！」

「俺はフェイトの敵ではない」

「……あんたの言葉、信じるからね」

アルフは俺とフェイトと共に転移魔法を使った。

そして俺とフェイト、アルフはフェイト達の部屋にやってきた。

「ねえ、あんたにはフェイトの怪我を治せるのかい？」

「まあ見てな」

俺はそう言い。両手を掲げ……

「サイフォジオ！」

「ちよつとアンタ！フェイトを殺すつもりかい！？」

まあ始めて見る人はみんなそんなことを言うだろうが……

「違うこれは治癒魔法だ。まあみとけ」

そして俺はフェイトに向けて両手を振り下ろし、その癒しの剣はフェイトの傷を治していった。

「す、すごい・・・」

「この魔法は怪我だけじゃなくて、日頃の疲れも少しばかり回復させる効果があるから、フェイトにはピッタリの治癒魔法だ」

「アンタそんな魔法が使えるのかい!？」

「まあね。けど、魔法は万能ではない。ちゃんと休ませないといずれは大きな事故に繋がるかもしれない」

「うっ・・・それは分かってる。分かってるけど・・・」

「お前たちにも人にはいけないことがあるんだろ？」

別に無理して話さなくてもいいよ」

「そうか・・・ありがとうね」

「ふっ・・・別に気にするな。俺は勝手に出てきて、

勝手に手伝って、勝手に出ていくだけだからな」

「・・・それはどうかと思うけどね」

「まあ俺はもう帰るけど、二人ともあんまり無理するなよ」

「ああすまないね」

「気にすんな。じゃな」

俺は炎を使ってゲートを作り

家に帰った。

(・・・アルフってスタイルいいよな・・・)

「マスター？何かおっしやいましたか？」

「い、いえ・・・何も」

「でしたらいいです」

今、デバイスから負のオーラを感じたよ・・・。

すれ違い（後書き）

アルフ「フェイト……」

無月「朝には目が覚めると思う。だが、あんまし無理なことはいえないが、

フェイトだって女の子だ。まあその辺のことはアルフが一番理解していると思うからあえて口にはしないぞ」

アルフ「本当にすまないね」

無月「別に良いよ言っているだろ。俺は勝手にやっているだけだ」

アルフ「……あるがとう」

無月「……それを言うならあ「り」がとうじゃね？」

アルフ「……の~~~~~」

アルフが首を締めてくる。

無月「（背中に柔らかいのが当たってるよ~~~~）TへT（く
う）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9474z/>

魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

2012年1月1日01時11分発行